

1. はじめに

近年、全国で河川や下水道の排水能力を超える大雨や、台風による浸水被害が数多く発生している。これらは、都市化の進展に伴う市街地の拡大により地表を流れる雨水の量が増加し、河川や下水道に集中して流れる「都市型水害」である。

名古屋市東区矢田地区においても、2000年9月に発生した東海豪雨は、1時間に97mmの猛烈な雨が観測され、総雨量567mmを記録し、周辺地域に甚大な被害をもたらした。その浸水対策として、大曽根雨水調整池が配備されたが、2008年8月に発生したゲリラ豪雨では、その機能を上回り、再び同地区に浸水被害がもたらされた。本工事は、周辺地域の浸水対策を目的とした管きょ工事である。

2. 工事概要

工事名：	第2次山田東雨水幹線下水道築造工事
発注者：工	名古屋市上下水道局
事場所：工	名古屋市東区矢田1丁目～大幸3丁目地内
期：	自) 2011年2月2日, 至) 2013年9月30日
工事内容：	工事内容：管きょ工（泥土圧シールド工法）1244m RCセグメント 1,759リング，鋼製セグメント 530リング， 急曲線部 R=15.0m 5箇所，R=30.0m 1箇所



図ー1 山田東雨水幹線位置図

3. 地質概要

地表部は、1m程度の比較的薄い盛土層が分布し、その下層には、沖積層のAc層とAs層が2m～5m程度分布している。さらにその下層には、鳥居松層の礫層が主体となって分布している。土質調査結果による地層想定断面図を検討した結果、沖積層であるAc層とAs層、また、鳥居松礫層であるDg層に管きょを構築することを決定した。地層想定断面図を図-2に示す。

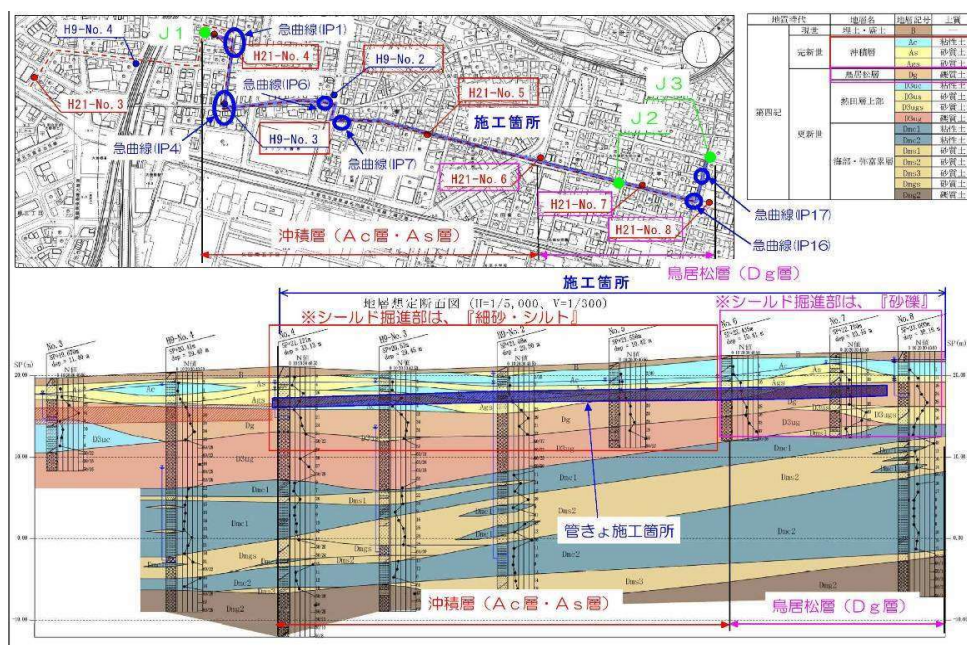


図-2 地層想定断面図

4. 工法概要

4-1. ミニシールド工法の特徴

ミニシールド工法は、仕上げ内空断面が $\phi 1,000\text{mm} \sim \phi 2,000\text{mm}$ の従来のシールド工法では不可能であった小断面の施工を可能とし、二次覆工の省略により工期短縮とコスト削減を実現した工法で、以下のような特徴があり、本工事と適用範囲の比較を表-1に示す。

- ① 二次覆工が不要である。
- ② シールド機の面盤形状や添加材の種類、濃度及び量を選定することにより広範囲の土質への対応が可能である。
- ③ 曲線半径10mの急曲線施工が可能である。
- ④ 1,000m以上の長距離施工が可能である。
- ⑤ 確実な裏込めが可能である。
- ⑥ 切羽の安定と裏込め層の形成により、地表面沈下を最小限に抑えることができる。本工事と適用範囲の比較を表-1に示す。

表-1 本工事と適用範囲の比較

	本工事	適用範囲
土質	砂礫層	軟弱土・粘性土・シルト・砂質土・砂礫層・玉石混り土・岩盤
曲線半径	15 (m)	10 (m)
施工延長	1244 (m)	1000 (m) 以上

4-2. シールド面盤の選定

土質調査結果を検討した結果、シールド機の面盤形状は、スポーク型を選定した。
面盤形状の選定フローを図-3に、スポーク型のミニシールド機の面盤を写真-1に示す。
ミニシールドマシン全景も写真-2に示す。

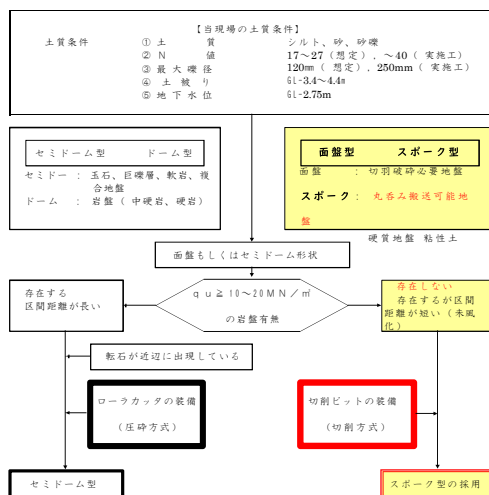


図-3 面盤形状の選定フロー



写真-1 シールド機面盤（スポーク型）



写真-2 シールド機全景

4-3. 施工サイクル

ミニシールド工法の施工サイクルは、①セグメントの組立、②裏込め注入、③掘進・裏込め押出しの繰り返し作業である。ミニシールド工法の施工サイクルを図-4に示す。

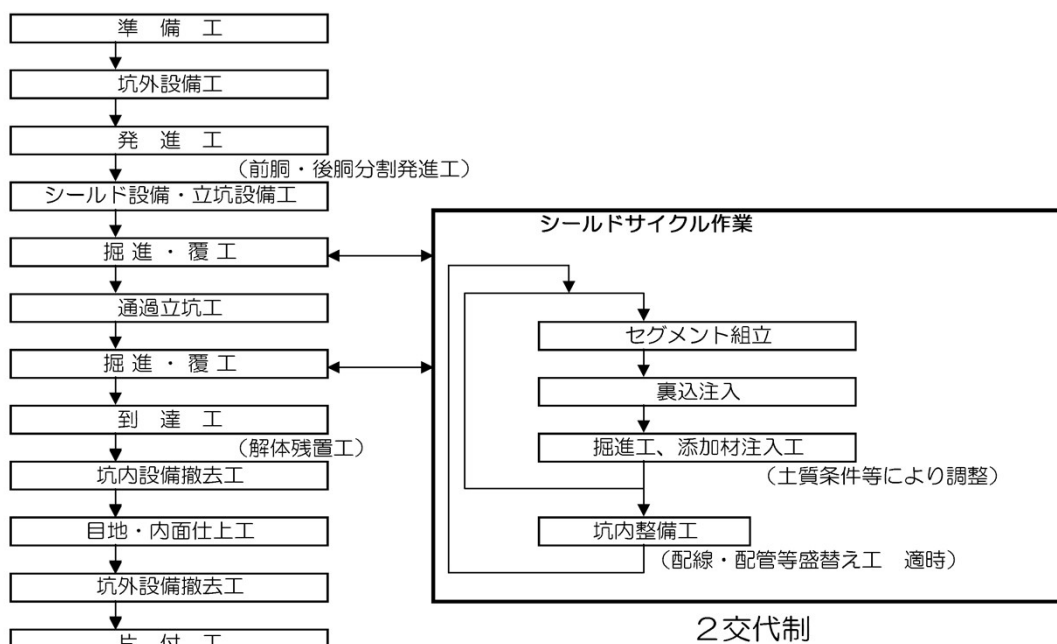


図-4 ミニシールド工法施工サイクル

4-4. 3分割セグメント組立

シールド機本体内部でのセグメントの組立は、セグメント運搬車に装備されたエレクターを用いて行う。セグメント割を中心角120度の三等分割セグメントにすることにより、幾何学的に安定した優れた構造になっている。

3分割セグメント図を図-5に示す。二次覆工が必要ない理由は、セグメント表面が滑らかでありコンクリート管（推進管）と同等の粗度係数があるためである。また、セグメントの継手構造は、凹凸ナックル形式の突き合わせ構造を採用しており、通常の結合ボルトを用いた継手構造と比較して作業性に非常に優れている。セグメント組立図を図-6に示す。



図-5 3分割セグメント図

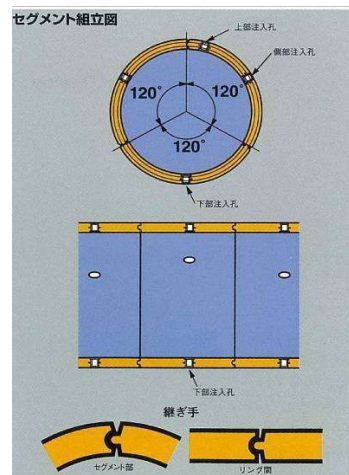
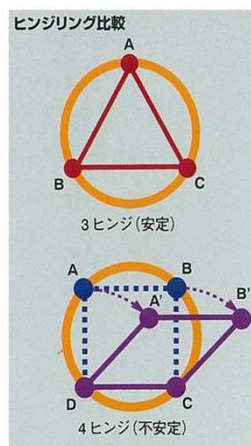


図-6 セグメント組立図

4-5. 裏込め注入(裏込めジャッキ)

セグメント組立後、テールプレート、スライドシール、既設裏込め層およびセグメントに囲まれた空洞に、裏込め材をセグメントの注入孔から注入する（図-7 ②③参照）。

ミニシールド工法は、従来のシールド工法と比べて常にシールド機内で裏込め注入を行うため、地下水で裏込め材が希釈されずに裏込め層を構築することができる。また、シールド機内の裏込め材は、裏込めジャッキで加圧され、外に押し出されるため、地山の空隙部を確実に充填でき、安全性に優れている。

掘進は、切羽の土圧を確認しながらシールドジャッキを伸ばし、シールド機を掘進させる。同時に裏込めジャッキを伸ばし、注入した裏込め材をシールド機テールプレート外へ押し出す（図-7 ④⑤参照）。

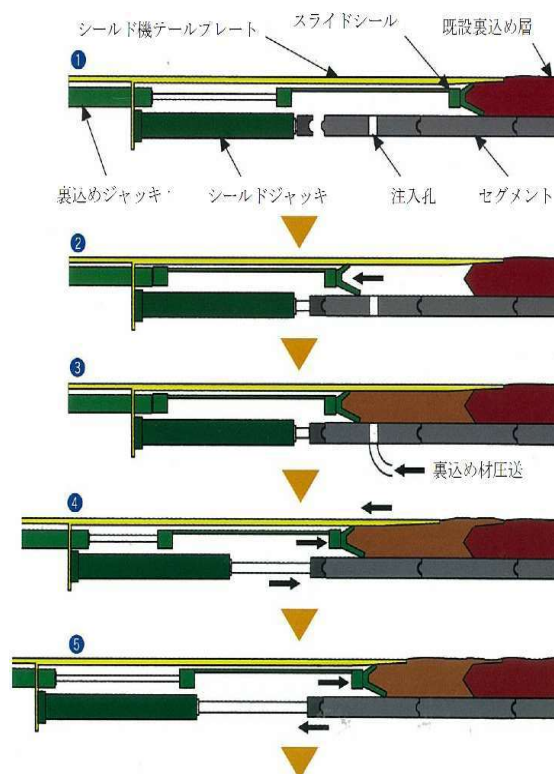


図-7 裏込め注入フロー図